

## 「綺麗な地球と漆文化を次世代に」

株式会社堤浅吉漆店 代表取締役社長 堤 卓也



皆様こんにちは、堤浅吉漆店の堤卓也と申します。よろしくお願ひします。先ほどの鞍田さんの講演、すごく面白かったです。僕は本当に民藝などは勉強したことはなかったですが、自分の考えていることがすごく民藝と親和性があるというか、民藝そのものが自分の中にいつの間にか生まれていたのだなと思っていました。

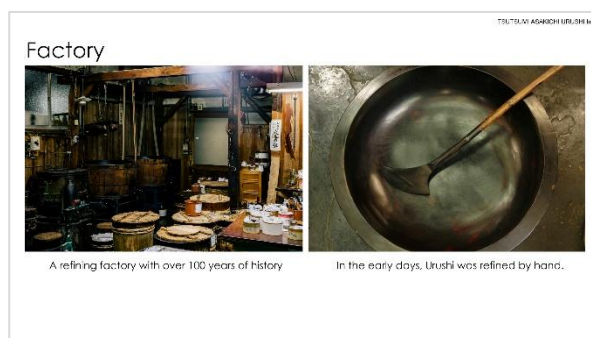
僕は漆屋をやっております。漆屋というと漆を塗っている、漆器を売っていると言われますが、漆の木の樹液を塗料にするのが仕事でして、朝から晩まで樹液と向き合っています。やはり漆とずっといる中で、先ほどの鞍田さんが話されていたような感覚が自分の中に芽生えてきたのかなというようなことを感じました。この綺麗な地球とともに漆を次世代にという題ですが、これは会社のみならず、仲間たちと目指している世界です。いま阿部先生が最初におっしゃられた環境問題、そこに大きく感じているのが、この近代の環境問題で一気に地球が傷ついていることと、僕は生まれて50年ですが、この50年で漆が傷ついていること、その地球と減っている漆の減少量を同じように感じています。

あと、地域と街の問題です。地域で作られたエネルギーや食料が都会で消費されていきます。日本の美しい大切な場所のエネルギー、若者たちはどんどん街に出て行って、大切な場所がどんどん傷ついています。先ほど、阿部先生がおっしゃっていた人の心の問題というのですか、どんどん便利に豊

かにとやってきたはずなのに、僕たちの心はぜんぜん満たされない。むしろ苦しくなっているのはなぜなのでしょうと思います。そこらへんのことを全て解決できるわけではないですが、漆や工藝というのが解決する一つのヒントになるかと最近感じるようになってきました。そう思えることが漆屋をやっていることの結構希望でもあって、それに対するアクションといったものをいろいろ行っているんで、今日ご紹介させていただけたらと思っています。

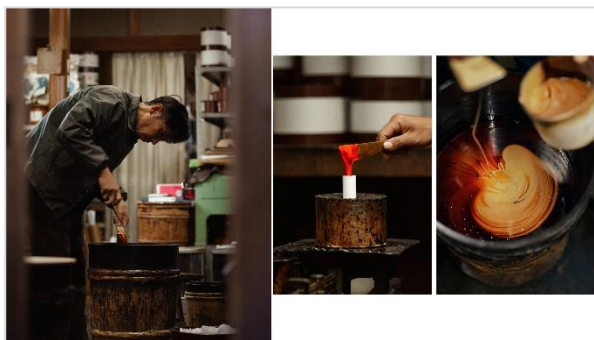
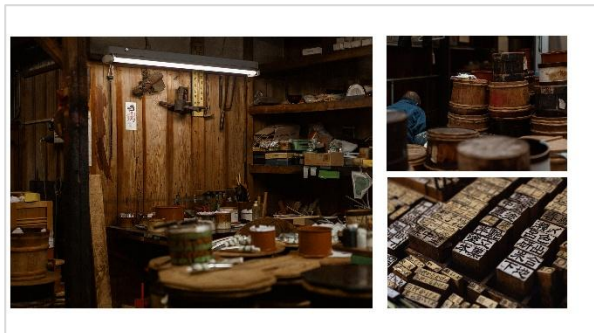


僕の祖父で4代前の浅吉が堤浅吉漆店を創業しました。

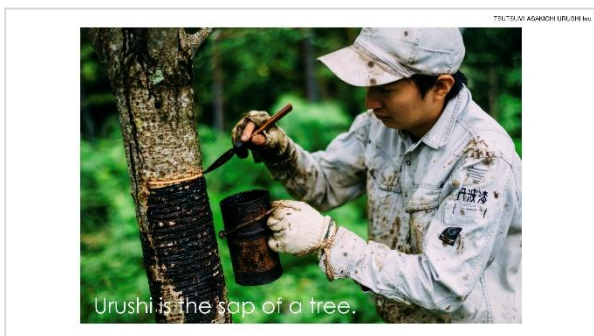


こんな場所で精製していますが、ここは祖父の家でした。僕は少し京都が苦手な大学から北海道に行って、そのまま向こうで就職していた口ですが、この場所の匂いや、音、そういったものは、帰ってきたら、やはり祖父に遊んでもらっていた記憶や、ものを漆で直してもらったことなど、ここに来ると思い出されます。なので、すごく大切な場所なのです。それで精製に

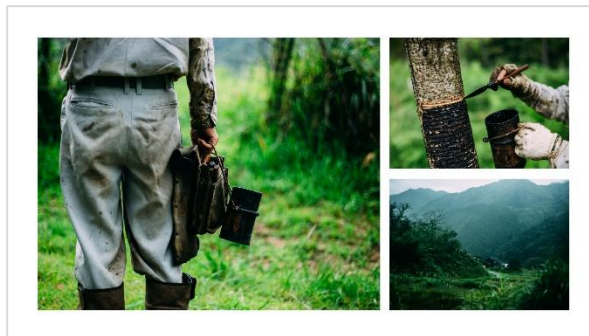
ついて、もう少し説明させてもらうのですが、祖父たちは昔、手で漆の精製を太陽の下で1日やっていました。祖母は、祖父がご飯食べているあいだも、子供を背負って作業を止めることができませんでした。



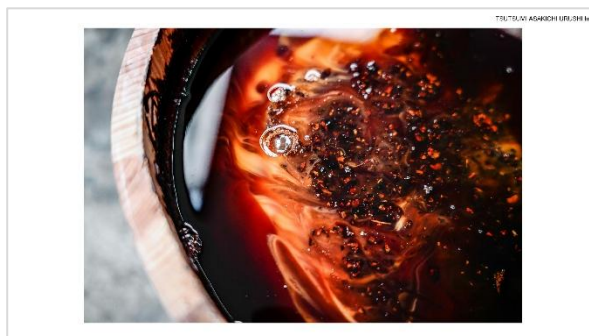
こんな場所でやっています。



漆は皆さんご存知だと思うのですが、少し説明をさせてください。15年くらい育てた木に傷をつけて樹液をいただきます。傷から自分を守ろうとして木が作る樹液ですが、この傷、4日ごとにつけていって、夏の最初から秋のいまの頃まで取ります。そして、季節ごとに太陽の光合成で作るので漆の性質が変わります。もちろん育った環境でも変わりますし、樹液を取る人の取り方、傷の入れ方でも性質が変わってきます。なので、そのいろんな樹液の特徴を生かしていろいろな粘り、乾き、艶というものを作り出すというのが僕らの仕事です。



人と自然の関係性がすごく高い仕事で、このような場所で行っている仕事です。



この人たちが取ってくれた、いただいた、この美しい樹液を精製させていただいています。




精製は何をしているのかというと、先ほど手でやっていた作業を、いまは機械で行っているのですが、こうやって練ることで艶や乾きを作り出すことができます。油を入れる漆もあるので、基本的にはつけているこれ、回転させている羽の設定やその日の気温など、選ぶ生漆によって、いろいろな漆を作り出すことができます。黒色というのも黒い顔料で黒くしているのではなくて、鉄との化学反応でできた透明の黒なので漆の黒はすごく奥行きがあると言われていた秘密があります。これも、その日の温度や湿度にすごく影響されるので、いくら毎日やっても読めないです。仕事としては大変で、振り回されますがす

ごく面白い作業です。

**Features of lacquer ware (shikki)**

漆器(shikki)  
= Lacquer ware

- Durability
- Heat Insulation
- Antiseptic
- Waterproof



そういうわけで、僕は漆のそういう作業の中でどんどのめり込んでいきました。そして、漆はすごく弱いイメージがありますが、本当はすごく丈夫です。車の塗料やウレタン 4H くらいありますが、ウレタン塗料よりも硬くて、漆は 4H くらい鉛筆コード試験ではあります。熱も 210 度くらいまでは大丈夫で、抗菌性、防水性があり、対薬品性もとても強いのです。なんでも溶かしてしまう、王水のようなものを使って、鉄に漆を塗って入れると鉄だけ溶けてしまうくらい、科学的なものにはすごく強いのです。しかし、自然のものなので太陽が当たると分解されて消えていきます。地球に何も残さないというのが漆です。

**How Urushi is used.**



Urushi is used not only as a paint but also as an adhesive. It can be seen in Buddhist statues and temple architecture.



Kinkakuji Temple

**金継ぎ**



- 金ノを大切にすること
- 傷痕を景色として楽しむ

漆は昔から塗料としてだけではなく、こうして金箔を張って接着剤として使われたり、金継ぎなどでは物をつける、これは金でつないでいるのではなく漆が接着剤になってひっつけられています。

**Urushi as a structural material**



Dry Urushi: technique of making sculpture using Urushi and hemp.

これは阿修羅像で中は空ですが、麻布と漆で構造体を作ることができます。現代、昔の FRP といった感じです。合成樹脂とガラスクロスが麻と天然の漆の樹脂でした。

これも宮城大学の土岐先生という方が、椅子を麻布と漆で作ったりしていますが、100 キログラムの人が座ったりしても大丈夫です。これも、いまの新しいテクニックで可能性を広げられる面白いところかなと思っています。

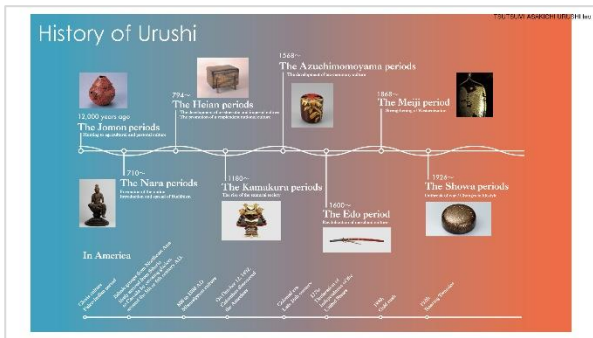
**Restoration of cultural properties**



Nikko Toshogu Shrine  
Our Urushi is used in many national treasures, and its share is 70%.

すごく派手な文化財修復といったところはあるかもしれませんが、そもそもは大事な木を守るために漆が塗られてきて、その中でいろいろな、自分の権威や荘厳な世界を表すために漆藝技術や

さまざまな技術が培われてきたのかと思います。こういったものがあるので技術と漆が繋がってきました。

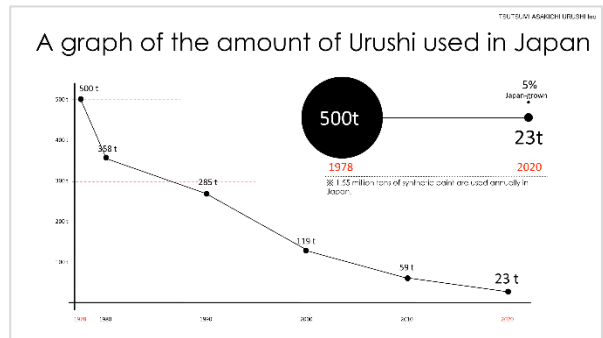


諸説ありますが、1 万年前くらいから漆は使われてきました。僕は歴史など得意ではないですが、1 万年前から漆が暮らしの中で使われて、平安時代は祈りの対象や貴族のものであったり侍の鎧、侍の誇りであったり、暮らしの中で漆がずっと使われてきました。そして生活の中にすごく根付いてきたものが、戦争があったときに、合成塗料ができたときに、漆を作っている人の価値も何か違うかたちで見せるようになったのかと、一つ大きな転機だったのでないかなどは思います。この1万年という長い時間軸の中に、ずっとその周りに人の暮らしと人の関係性があったという、このスライドの線ですが、その周りにずっと輪があるというのが面白いなと思っています。うちの会社も100年と少しですが、先ほど鞍田さんが言っていた民藝100年の、その100年というあいだの中でいろいろなことが起こってきた、まさに戦争などを体験してきた激動の時代の中で漆と関わってきたのかなと最近感じています。



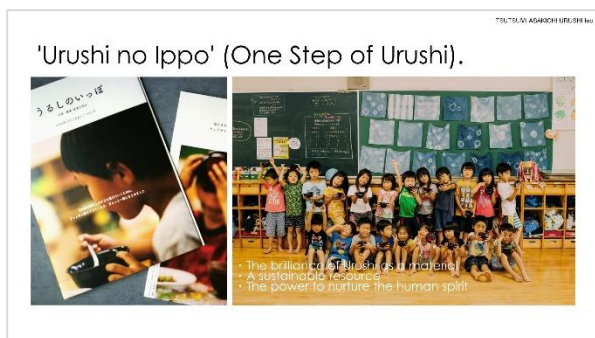
僕は完成された美しいところもすごく好きですが、この生の状態の美しさをたくさんの人に見てもらいたいです。やはりこれは、映像や写真でしか見てもらえないですが、この手触りも好きです。漆は赤ちゃんの肌など、しっとりサラサラすると質感は言われますが、しっとりするものはベトベトすると思われるの

ではないでしょうか。また、サラサラする漆は本当はすごく硬いんです。硬いものは冷たい、痛いと思うところが柔らかく感じるといのは、漆が水分を持ったまま固まる唯一の塗料で、水分でできている人間が触ったときに柔らかい、温かいと感じるのだろうと言われているところもあり、僕はその質感がすごく好きです。その質感が、人がものを大切にするという気持ちを育てているのかなと思います。それが、日本人のこういった所作も生んだのかなと思います。お椀でものを食べる場合に、海外の方はスプーンで食べるところを日本人は口をつけて食べるようになったのも、こうしている姿が祈りの形に見えていたりするのも、ここから生まれたのかなと思います。漆屋が漆最良なのかもしれないですが。僕は先ほどサーフボードなど紹介いただきましたが、やはり取り戻したいのは器の形と祈りの形をいまの日本に取り戻したいと思っています。



そのように感じるようになったのは、僕が生まれた頃は漆は500トン使われていたのが、いまは23トンまで減っています。この現象は、僕が生まれてからそんなに世の中が変わったのかなと思います。やはりいろいろ感じていたら激動ですね。携帯も、先ほどの少しのことでこんなにすごいものに変ってきています。毎日暮らしていたら何も変わっていないような気もしていますが、50年でこんなになってしまい、国産漆はこのうちの5パーセント、2トンもないというのが現状です。あとの95パーセントは中国からの漆にお世話になり、なんとか日本の文化が繋がっています。それに伴い素材や道具を作る職人さんたち、塗っている職人さんはもとより木を植えている人、木から樹液を取る職人さん、いろんな方がこのままでは暮らしていけないという状況になっていて、これと地球環境が傷ついているのが同じように、いつの間にか自分の中では感じるようになっていきました。これを、なんとかこちら向きにしたいという思いが僕にはあります。それを感じられるようになったのが、いまの

さまざまなアクションや、おそらく知らずに分かってしまった民藝という考え方を感ぜられるようになった時に、僕たちは漆を使って、工藝を使って、いまこの環境をこちら向きにできるのではないかと思うようになりました。それが思えるようになってからはすごく明るくなっています。



漆屋はあいだにいる仕事なので、すごく漆にのめり込んでいった時に、どうにもならない現状を目の当たりにし、何もできない自分に絶望感といったものを感じていて、その頃なんとかしたいなと思って始めたのがこの「うるしのいっぽ」です。2016年に始めました。何も変わらないかもしれないが、いまやらなかったら後悔すると思いました。いま、うちの会長である父親がまだ仕事をしてくれています。なので、うちの会長が仕事をやってくれているうちに、いま自分ができることをやりたいと思い、始めました。素材としての魅力、できた美しい姿だけではなく、そこに携わる木を植えている人、取ってくれている人たち、それを使う人たちが、そこに携わることでどういうふうに変わっていくかといったことを伝えたくて、冊子を作ったり映像を作ったりして伝えるということを始めました。いつも工場にいたので、こうしてスーツのようなものを着て大学の講義で初めてしゃべらせてもらった時は汗だくになっていました。

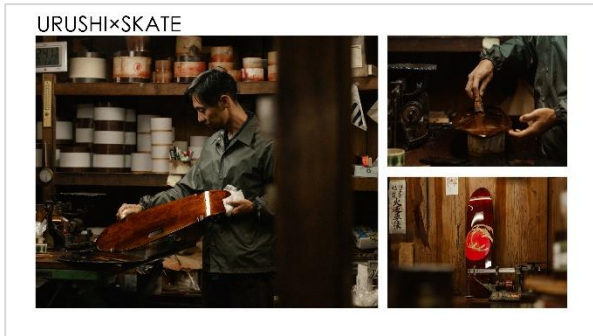


しかし、そこから始めて結構いろいろなところでしゃべらせていただいて反響はありましたが、結局僕が行くのはこういう環

境問題のところなどではなくて工藝関係者のところばかりでした。



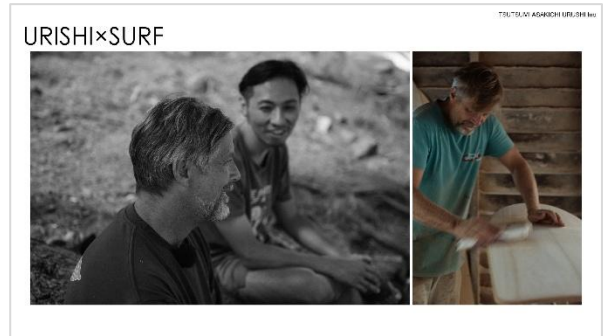
そこでいくら漆が大切だという話をしても世界が何も変わっていないし、何もやっていないのと一緒にだと思った時に、この BEYOND TRADITION、世代も国も越えて、漆の素材としての価値を伝えたいと思うようになりました。漆でコラボして高級品を作りたいなど、そういうことではなく、漆が持っている素材としての価値を伝えようと思いました。スケートボードに漆に塗った時は先生方にすごく怒られましたが、足で踏むものに、傷がつくものに漆を塗るのかと言われました。ただ、僕はデニムや革みたいに使い込んでいくことでその素材の良さが出てくると思っています。傷の入れ方もやはりその人のスタイルなのです。それができることで、ものに愛着を持って長く使っていくことであったりします。先ほどの甲冑もそうですが漆は焼き付けができます。焼き付けすることで防錆し、美しさも保つことができるすごく強い素材となるので、自転車に漆というのも考えました。それを見せたいのです。これはサーフボードです。僕もサーフィンしますが、サーフィンのおかげで僕は山や海の大切さ、勝手にビーチクリーンをしたいという、自分がやりたいという気持ちに変わるようなきっかけをくれたものです。しかし、サーフボード自体は発泡スチロールと合成樹脂でできているので地球に帰らないゴミになります。それを使って地球で遊ばせてもらっていることにわだかまりがあり、100パーセントナチュラルなサーフボードが作りたいたいと思いやり始めたのが木製のサーフボードでした。



こうしたアイコンのようなものを作ることでいろいろ伝えるというのを始めて、実際に乗って自分の道具として育てていくことにしました。



こんなところで飛んでは駄目ですが、これも世界チャンピオンに10回くらいになっている内野洋平くんや、トム・ウェグナーさんと映像も作りました。



自分の込めたメッセージです。トムさんも木製のサーフボードを作っていて環境問題の意識がとても高い方です。彼は僕のスーパースターで、映画の中でしか見たことなかった人にアプローチして一緒に映画を作りました。



これはアライアという古代ハワイアンが乗っていたサーフボードで、丸太一枚から作り出せる100パーセントナチュラルなサーフボードということで作りました。これはとても早く、トムさん、ガスと呼んでいますが、ガスもこれはすごいと言ってくれていたものになります。



そういった自分のメッセージを載せたものを作って、海外の映画祭などでも上映させてもらい、ショートフィルムでベストなどもいただいたりしました。



僕は英語がそんなにできないですが、展示などもさせてもらおうとたくさんの方が来てくれて、いろいろな話をいただきました。美しい、循環可能な素材、木だよなどと、皆さんがワンダフル、素晴らしいといった感想をいただきました。漆のことを必死に説明すると、彼らが一番言ってくれるのは、日本人が1万年前から漆の木をつないできたことに対する称賛でした。俺らにそんな長い歴史はないのにお前たちはすげえな、かっけえなとすごく言ってくれます。

しかし、僕らはそれを大事大事という言葉だけで実際には守ろうともしない、守りたいという気持ちをなくしてしまっていて消そうとしていることを残念に思います。本当に駄目なものならいらないと思いますが、僕はすごく可能性を感じていて、それをこのまま消すのは嫌だと思い活動をしています。



実際にトムさんにも来てもらい、いろいろなところでその映画を上映しながらトークイベントをやったり、京北で木植えをしたりしています。

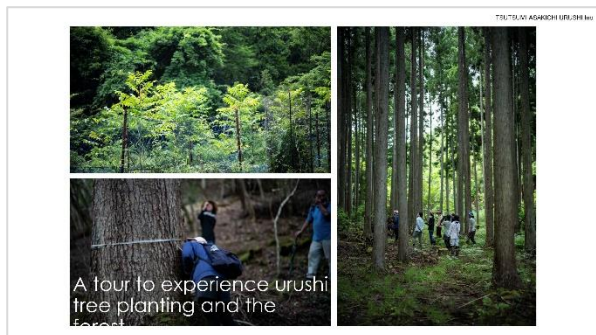


そこに全国から木のサーフボードに興味のある人たちが集まってくれて、トークイベントをやり、京都から始まって湘南まで少しずつ移動しながらワークショップをやり、子供向けのワークショップや上映会をやり、試乗会をやるといったことをしながら動いていきました。すると、僕の工藝では考えられなかった仲間たちがどんどん増えていきました。



その中で、僕が一番伝えたかったのは、伝えたいというか一緒にやりたいと思ったのは、植えるから始まるものづくりなのです。工藝の魅力は、やはり素材を植えるところから始まっていて、その素材があるおかげで僕たちは物が作れるということです。先ほど鞍田さんも言っていましたが、ワンクリックで、すぐにものがなんでも買える、ワンクリックの向こうにはものが無限にあるように感じてしまう世の中ですが、すべてのものは植えられて作られて準備されているからこそであり、そこが全部、いま分からなくなっているのではないのかとなったときに、植えるから始めようと考えたのです。杉や檜みたいに50年100年ではなく、漆は15年で育つので15年先を想像するものづくりっていいなと思いました。先ほどのサーフボードも桐です。桐も15年くらいで育つので、トムさんと15年後の子どもたちに送るサーフボードプロジェクトを始めようと考えました。いまのものづくりはすぐにすぐにとりますが、やはりその先を見据えたものづくりのようなことをしたほうが、わくわくするし楽しいし、自

然だなど僕は思います。その価値がうまく伝えられるようになれば、この「うえる」から始まって、「そだてる」、「いただく」、「つくる」、「つかう」、「なおす」までの、この循環した輪がもう一度取り戻せるのではないかと思います。



植えるということをみんなでやりながら、森に入るということもしています。これは植えた漆が少しずつ大きくなっているところです。これは、私がパースペクティブという共同代表でやっていて、高室幸子さんという方と一緒にやっています。



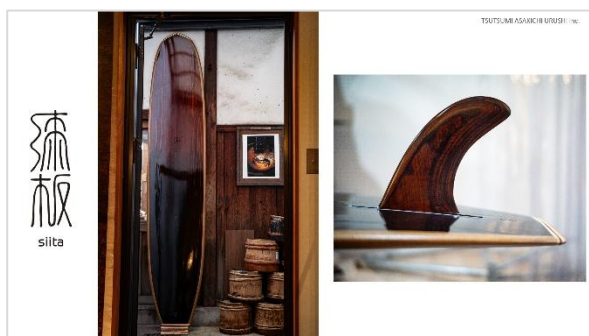
そして、先ほどの 3 つ、サーフボードなどを作った時は象徴として作りましたが、僕はものづくりの人間ではなかったので、精製屋がものを作るというところに少しハードルがありました。しかし、やはり植えるから始まるものづくりの象徴としてこの漆板、siita というものを作るようになりました。これは京北という先ほどの場所に 100 年前くらいの農作業小屋を、下の床に漆を塗り地元の材を使って、みんなで直したシェイプルームです。サーフボード自体も地元の木を使いながら板を作っています。



こちらはホドリゴという日系のブラジリアンですが、彼がシェイプしています。彼は日本の工藝にすごく敬意を払っていて、彼と日本の工藝そのものではなくて、やはりミックスされた感覚も入れつつ素晴らしい板を作ります。素晴らしいというところには、もう言葉では話せないいろいろな要素が入ってきますが、その板を作りたいねということで作っています。



僕はその木を守るために漆を塗っています。



このフィンなども、竹と木やカーボンと木など、いろいろなものの組み合わせの中で機能と性能、美しさというものを求めて作っています。



サーフボードだけではなくスケートボード、ボディーボード、雪板というスノーボードのようなものなど、いろいろな遊び道具をそれぞれの地元の材を使いながら作ったりしています。



拳大くんが乗っているのはアライアですが、彼が漆のサーフボードに乗ってくれた時に言っていたのが、自分が波と一体化しているようだということです。僕は昔、漆は撥水性だと思っていたのです。しかし、科学者の方に聞くと浸水性で漆とすごく馴染むということでした。水は漆とすごく馴染むのでサーフボードは速く走ります。なので、拳大くんは自分が波と一体化しているような気がする、板の存在を忘れると言ったのです。それは道具としては最高の形かなと思っていて、自然物だからこそそういった存在が作れることがあるのではないかと思います。

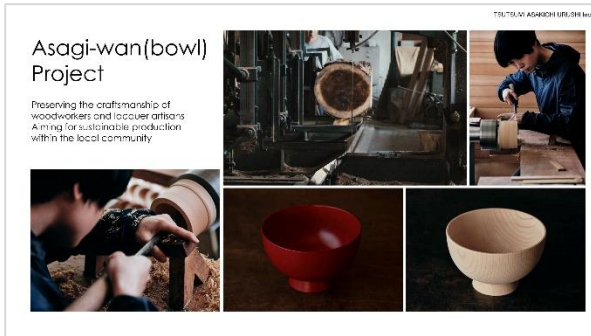


こうやってプロサーファーの石川拳大くんが乗ってくれたり、海で使うものを山で作っています。



先ほどの話ではないですが、山と海は当たり前につながっているということを、いま忘れられている世の中でもう一度つながり直したいという思いがあります。

この縄模様、漆でこれもつけているのですが絞漆(しぼうるし=漆に豆腐などのたんぱく質を混ぜて粘り気を出したものを)、刷毛目塗りというお茶道具を使ってお茶道具の技法で、漆の流動性がなくなってざらざらになるのを利用して、これを作っています。これはざらざらしているので、本当は滑り止めのワックスを塗ってサーフィンします。しかし、それがまた海に落ちてゴミになるので、ワックスを使いたくないのです。できればナチュラルな板を作りたいので、こういう技法、技術で板を作ったりしています。



サーフィンばかりしゃべっていると遊んでばかりと思われてしまうので、一番自分が残したいと思っているお椀のプロジェクトです。漆もすごく大変な状況ですが塗りの技術も残るのが大変です。生地技術も大変になっていて、こうして生地を引ける職人さん、お茶道具の薄いのを引ける方は京都にあと1人しかいないという状況に前までなっていました。その人の技術がなくなると、そこから生まれていたいろいろな文化がなくなるなどということで、主の西村さんという方と、いろいろな方たちを含め一緒になって若い子たちにその技術を残そうというプロジェクトを立ち上げました。ただ、お茶道具をいまの社会の中でたくさん作るというのはやはり無理なので、日常、京都で使われていたお椀の形を復活させるようなことができないかなというので、この文献があったアサギ椀というものを形は分からないで作りました。すごく高台が高いのが特徴です。地元のヒノキを使って薄引きして作るというので若い生地師さん2人が独立、1人は独立して、1人はまだ師匠の下にいますが、独立するというかたちでできました。塗るというところに関して、京都の塗りを育てるという意味でやっています。



独立した上田くんが働く場所を、京北の廃校を利用して地元の木を使ってものを作る場所、ファブビレッジ京北という場所を作ってやっています。ファブと名前をつけているのは、こういう昔ながら、これは和ろくろではないですが、和ろくろとい

た技術も残すし、ファブツールを使うことでミニマムに地元の資源を使って、地元でものが生まれて地元にお金が落ちるシステムを作りたいという思想の下に始めました。これは共同代表の高室さんがとても頑張って作ってくれた場所で、僕は彼らに新たな仕事を生み出すというので、僕はどんどん仕事を彼らに渡すようにして頑張ってきた感じです。



ただ、やはりその中で職人仕事というのはすぐ手がいっぱいになるのです。その中で、ではもう少し違うかたちでものが作れないかなというので、今日持ってきているのは3Dプリンターで器を作るということです。これが僕の中でもすごく葛藤があって、この形に美があるのかなとか、ここから美が生まれてくるのかなというのを思いながら、いままことに取り組んでいる途中です。素材自体はPLA(ポリ乳酸)という生分解性のもの、サトウキビとトウモロコシの食べられていない部分からできた樹脂を成形して、水に戻る素材に漆を塗ることで、もしかすると1万年使われる器を作ることができるかもしれないということをやっています。なので、これを表現するのに革を使ったり和紙を使ったり、骨粉を使ったりしながら、何をすることがこれを作るこの意味になるのかというところを考えています。自分の中では足りない生地を補充して、塗りの職人さんたちを育てるという名目はありますが、ここにはすごい葛藤はまだあります。



ただ、やはりいろんな用途があって海外に持っていき

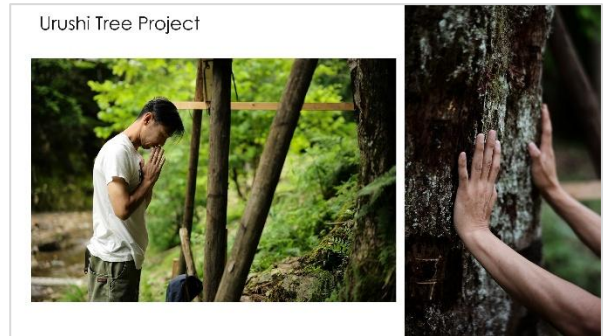
は割れにくいのです。やはり生地が海外に行くと乾燥して割れることがあるのですが、これはそういうのがなかったりして海外に持って行ったりもしています。



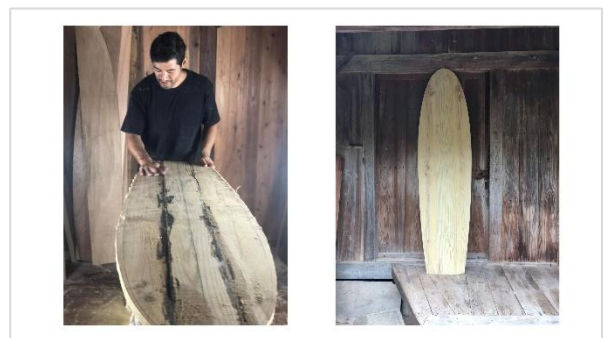
そしてこれは、いまよく問題になっている熊ですが、昔から熊が50年、100年育ててきた木の大切な一番いい部分を剥ぐことで、そこが使われなくなっています。



しかし、剥がれた半分側はすごく良い材であったりするので、壊れてしまっているところをうまく使ったり、漆で強化することでもっといろいろな価値をつけられないかと考えています。あの木も放置されると、やはりそこから山が荒れて災害の基になっていたりしますが、切るには赤字になるので木くりさんも切れないのです。そこで、林業家の友達などから聞いて、一緒にプロジェクトとしてきちんとした値段で僕らが買うからその木を切ってもらおうと考えました。僕らはその木を体積で見るのではなくて、その木それぞれを見て、使える部分はどこまで使えるのかというのを考えました。見て手を動かすというのが工藝にできることなのではないかと思い、ものづくりをやっています。この変な形をしているやつはボルダリングのホールドです。工藝とは程遠いですが、幼稚園で子どもたちが手を触れる、体を動かすところに使ったりしています。



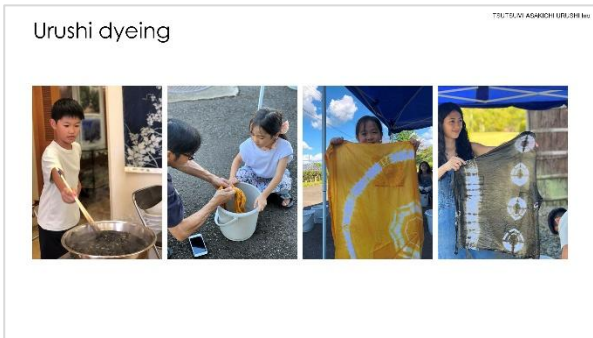
漆は15年大切に育てられますが、結局樹液を取られたあとの木は使われていないです。細くて材として使うのも大変です。製材するときに木はかぶれないですが、木部と皮のあいだに漆があるので、製材するときに残っていると飛んできてかぶれるから製材所でも嫌がられたりして使われていません。



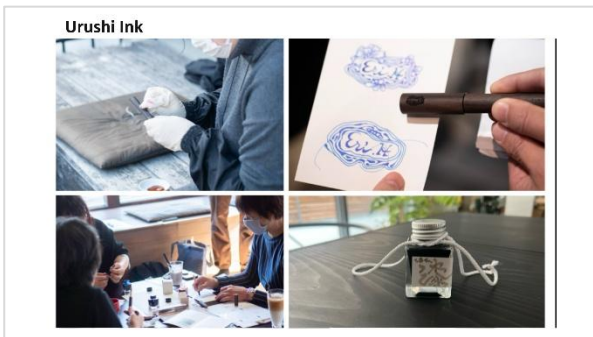
しかし、やはり命をいただくからには全部うまく使いたいなと思いました。これは漆で引っ付けているのですが、また性懲りもなくサーフボードを作りました。漆の木は黄色くて綺麗で、軽くて耐水性があるので、実はサーフボードにもしかしたら向いているかもしれません。サーフボードに使えるということはすごく丈夫ということも言えるので、何か使い方を見せるのに自分なりの見せ方をしています。



漆の木そのものをそのまま切って、植木鉢を作ったりお椀を作ったりしています。黄色を見せるのでオイルを外に塗って中側は漆を塗っています。やはり職人の世界でいうとオイルを塗るのかと言う人もいますが、僕はこの黄色の美しさを見せたかったので外はオイル、中は漆というかたちで器を作りました。



いまこれは、またいろいろプロジェクトを進めているところで、一昨日も能登から職人さん、作家さんに来てもらってやっていたのですが、漆の木自体も草木染めができます。ものを作った時に削った木のカスから染色液を作り、染めができれば面白いなと思い、全部使いたいのてこういう染めのことをやってみたりなどしています。



青色は少し違いますが、万年筆に漆を塗るというプロジェクトをやっている時に先ほどの木のカスから古代インクのようなものを作ったりなど、プロダクトにしたいというより僕は可能性を

見せたいということで行いました。



あとは、漆の「ろ」を使って化粧品を作れないかなど考えています。木を植えてからの15年間は、漆は収入がなくなるので、そのあいだにこの木とどう付き合っていくか、どう暮らしていくかといったことをイメージしながらものづくりをやっています。そういった地域でのこと、街でのこと、それを伝えるために、先ほどの古い工場の手前に銀行のようなあまり面白くない事務所がうちにあったので、作り直してこんな場所を作りました。



場所を作り、いろいろ若い子たちに漆を伝えるような活動をしながら、漆の用途拡大といったことをやっています。海外にもものごとを伝えたりなどしながら、素材として何が見せられるかというのをやっていますが、一番やりたいのはここで、山と海をつなぐことや地域と町をつなぐこと、世界と日本をつなぐことなど、漆を通してつなぐことのできる輪というのが、まだまだあるなと思ったときに、工藝でできることはすごく小さな輪だけかなと思っています。小さいからこそ強い輪ができていて、その地域の特徴を生かした風土を生かしたものづくりこそが工藝かなと思ったときに、その工藝の輪っかが日本中に広がっていき強くなっていったときに、そのあとに繋がっていった大きな輪ができ、いまの世の中でいうSDGsといった世界ができるのかなと思い、その輪作りのようなことをしたいと思っています。



僕は村が作りたいのですが、暮らしの中に漆があって、その中で人たちがいろいろな関わり合いを持ちながら生きている、その中に漆や工藝があり、豊かな暮らしにつながっていくような、自分が老後になったときに、自分が携われる何かを作りたいというの、いまそれも仕事になるのではないかと考えて取り組んでいるところです。

以上で終わります。ありがとうございました。

(終了)